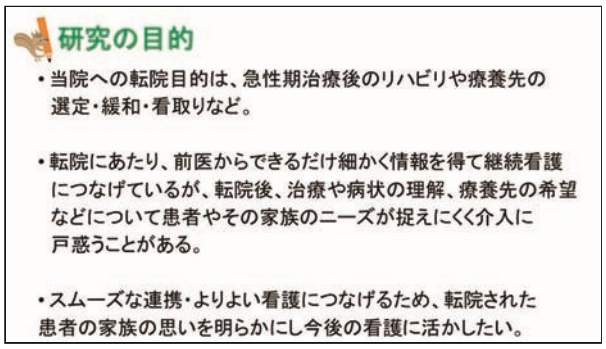
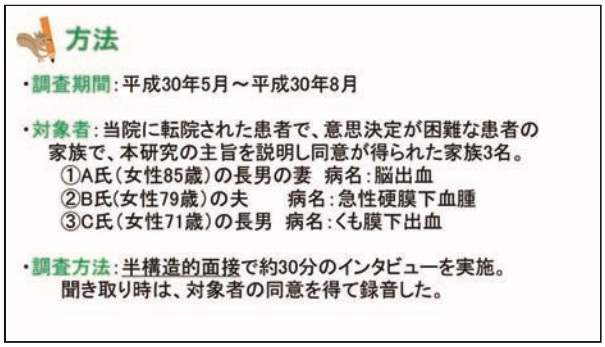
演題 228	**転院患者家族の思いを明らかにする**
	発　表　者　高橋　睦子（島根県　雲南市立病院） 共同研究者　内田由美子、江角小百合、三島　康文、渡部紗也香、土江　　隆、 板持さとみ、大谷　　順

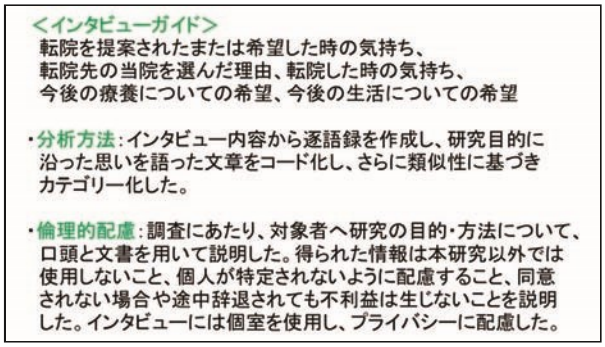


《目的》

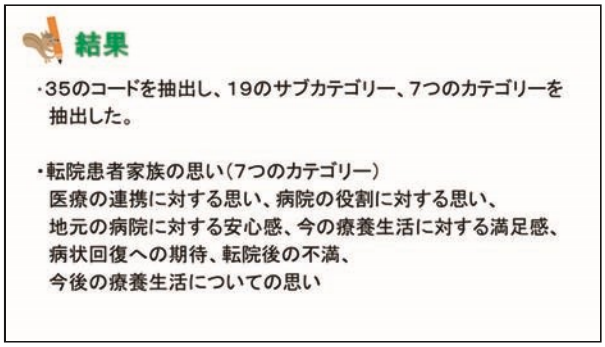
雲南市は島根県の東部に位置する中山間地域である。当院は病床数281床のケア・ミックス型の病院であり、隣接する松江市、出雲市の３次医療機関から多くの患者を受け入れている。当院への転院の目的は、急性期治療後のリハビリや、療養先の選定、緩和、看取りなど様々である。転院にあたり前医から出来るだけ細かく情報を得るようにしているが、転院後、治療や病状の理解、療養先の希望などについて患者やその家族の思いが捉えにくく介入に戸惑うことがある。そこで、スムーズな連携、より良い看護に繋げるため、当院に転院された患者の家族（以下、患者家族とする）の思いを明らかにし今後の看護に活かしたいと考えた。

《方法》





《結果》



①〈医療の連携に対する思い〉のカテゴリー

「前医の説明を聞き現状を受け入れた」のコー

ドの反面、「転院後の医師の説明に、厳しいなと感じた」のコードもあり「説明の違いへの戸惑い」のサブカテゴリーを抽出した。また、「転院前病院の相談員から当院を紹介してもらったことについて感謝する」のコードもあり、「相談員への感謝」のサブカテゴリーを抽出した。

②〈病院の役割に対する思い〉のカテゴリー

「いつまでも急性期病院ではリハビリは出来ない」「どちら（の病院）が上、下という感覚は持っていない」のコードから、「３次医療機関と当院の役割についての理解」をサブカテゴリーとした。また、「回復期のリハビリが出来ることを選んだ」や「脳神経外科外来があり診てもらいたい」、「病院の建物が立てなおされて設備もよくなり安心」のコードから「病院機能、設備に対する期待」のサブカテゴリーを抽出した。

③〈地元の病院に対する安心感〉のカテゴリー

「面会に何度か来たことがある」や「通院や仕事で訪れたことがあり不安はなかった」のコードから「病院に対して良いイメージを抱いている」というサブカテゴリー、「自宅からより近い」のコードから「見舞いに通いやすい」というサブカテゴリー、「職員と地元の話が出来ること」「本人の生まれた土地でリラックスしている」のコードから「地元にいる事の安心感」が、サブカテゴリーとして抽出された。

④〈今の療養生活に対する満足感〉のカテゴリー

「医師から定期的に説明を受けている」のコードでは医師の説明に満足しているサブカテゴリーを抽出した。「看護師が気配りをしてくれている」「おむつ交換をしてくれている」のコードから「看護ケアに感謝する気持ち」のサブカテゴリーを抽出した。また、「回復期リハビリ病棟に入棟でき満足」のコードから「病院の機能に満足している」のサブカテゴリーを抽出した。「色々な療法士にリハビリをしてもらっている」、「上手な関わりをしてくれて楽しくリハビリが出来る」のコードから「十分なリハビリに満足している」のサブカテゴリーを抽出した。

⑤〈病状回復に対する期待〉のカテゴリー

「訓練してよくしゃべるようになった」「よくなっているので面会に来るとき張り合いがある」というコードから「回復について嬉しく思っている」のサブカテゴリーを抽出した。さらに「出来るだけよくなってほしい」「受傷前のように戻ってくれるとうれしい」のコードから「出来るだけ良くなってほしい」のサブカテゴリーを抽出した。

⑥〈転院後の不満〉のカテゴリー

「転院当日に待たされた」のサブカテゴリー、「希望する回復期リハビリ病棟に本当に入棟出来るのか不安」のサブカテゴリーを抽出した。また、「駐車場が狭い」のコードから「病院の設備に対する不満」のサブカテゴリーを抽出した。

⑦〈今後の療養についての思い〉のカテゴリー

「今後の相談を民生委員や地域の看護師に相談している」、「在宅で介護出来ないから申し訳ない」のコードから「これからの療養生活についての思い」のサブカテゴリーを抽出した。

《考察》

私たちは、３次医療機関から当院に転院された患者の家族は、当院の設備や機能、主治医の変更、看護体制の違いなどから不安を感じておられたのではないか、と考えていた。しかし患者家族は前医の病状説明を理解出来ており、病院機能の違いについても理解出来ていた。転院後、前医の説明よりも厳しい病状説明を受け、戸惑いを感じたケースもあったが、当院医師の説明にて現状を受入れ、前向きに今後の療養について考えられていた。前医の説明をどのように理解されているかを確認しながら、適切な時

期に適切な説明を行うことが必要である。

また、患者家族は、当病院の機能を十分活用したいと考えており、転院当初は一般病棟入棟であったため、実際に回復期リハビリ病棟に入棟出来るまでは不安を感じていた。これは、転院後に新たな不安が生じていることを示しており、患者家族の疑問や思いについて細やかに対応する必要がある。

地元の病院である当院については、普段から慣れ親しんでおり、初めから良い印象を抱いていた。また自宅から近いことから面会に来やすいことも安心感に繋がっていた。看護師や他のスタッフと地元の話をすることに患者のみならず家族も安心感を持っており、地元に対する愛着を感じていることが分かった。

また、当院でのリハビリについては感謝する言葉が多く聞かれた。「いろいろな療法士にリハビリしてもらっている」「上手な関わりをしてくれて楽しくリハビリが出来ている」などの言葉からリハビリスタッフの関わりが療養生活のモチベーションを上げる一端を担っていると考える。リハビリスタッフの専門的な関わりによって、患者の入院生活に活気が生まれ、家族の満足度も向上したと考える。

また、看護師の気配りに感謝する言葉も聞かれ、看護師の振る舞いが患者家族に良い印象を与えていることが分かった。患者家族は、医療者の良質なケアや気配りのある関わりに期待を持っており、転院後の満足感への大きな要因になっていることが分かった。

また、患者家族は、病状やADLの現状を病状説明にて理解出来てはいるが、根底には「受傷前のようになってほしい」「出来るだけ良くなってほしい」と考えていることが分かった。「良くなっているので面会にきて張り合いがある」の言葉に表される家族の思いをくみ取り、面会される家族に患者の細かな変化や日常を伝えるなど、家族の思いに対する気配りをする必要がある。

一方、転院当日に外来で待たされた不満や駐車場不足の不満もあった。これらについては設備や当院に到着から病室に入るまでの一連の流れに問題があると考えられ、今後の改善点でもある。ハード面の問題は全てを改善することは難しいが、細やかな声掛けや気使いを心がける事で、転院された患者家族を気持ち良く迎える事が出来ると考える。

今回、患者家族の思いを明らかにするために半構造的面接を用い質的研究を行ったことは、患者家族の思いを深く理解するうえで有効であった。半構造的面接は、様々な病態や背景をもつ患者家族が自由に語ることに意義があると考える。「なぜあそこの家族はこのような行動をとるのだろう」などと私たちが漠然と感じていた日頃の疑問が、逐語録からコード化しさらにカテゴリー分析することで、明らかになり理解を深める事が出来た。

患者家族の声に耳をかたむけ、ときに、技法を用いて深く分析・類型化し、思いに寄り添った看護を提供していくことが私たちの使命であり、今後は、本技法の標準化を目指して症例を重ねる必要がある。

《結論》

1、転院患者家族の思いについて、35のコードを抽出し、19のサブカテゴリー、七つのカテゴリーを抽出した。

2、半構造的面接を用いたインタビューは、様々な背景をもつ患者家族の思いの理解を深めるために有効であった。今後は本技法の標準化を目指して症例を重ねる。